

# BeV standard

BeVは、ビーヴィと読みます。ちょっとフランス語っぽい響きですが……。

建築家秋山東一が、たくさんの仲間たちとつくりだした、

Be-h@us (ビーハウス)と、

Volks (フォルクスハウス)を併せた略語です。

この二つの取り組みを拠りどころに、

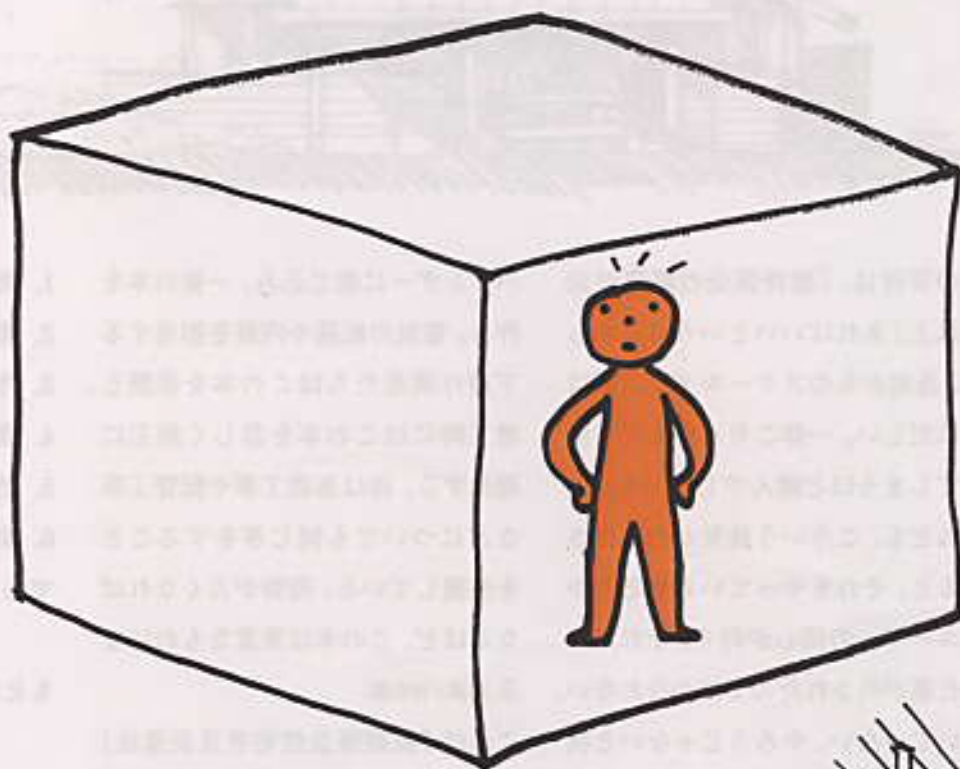
日本の新しいスタンダード住宅をつくらうという

工務店が加わって、ここに新プロジェクトが動き出しました。

それが、BeV standard です。

手ごろな価格で、質の高い住宅を生み出す、

待望の取り組みです。



同の工務店ネット支援プロジェクト

設計/秋山東一 (ランドシップ) + NPO法人BE-WORKS

プロデュース/小池一三 (有限会社小池創作所)

## 話題の「200年住宅」に対する秋山東一の回答は、 〈じかん〉デザインがあるかどうかだという。

「200年住宅」！？  
いいじゃない、  
やろうじゃない！

「200年住宅ビジョン」をベースにした「長期優良住宅普及促進法」が動き出し、年内にも施行される可能性がある。業界は、これで沸騰しているが、肝心の法律には、ビジョンの根幹をなす「200年住宅」は一語も出てこない。

〈じかん〉が経つにつれて建物に何が起こるかを、事前に調べること！

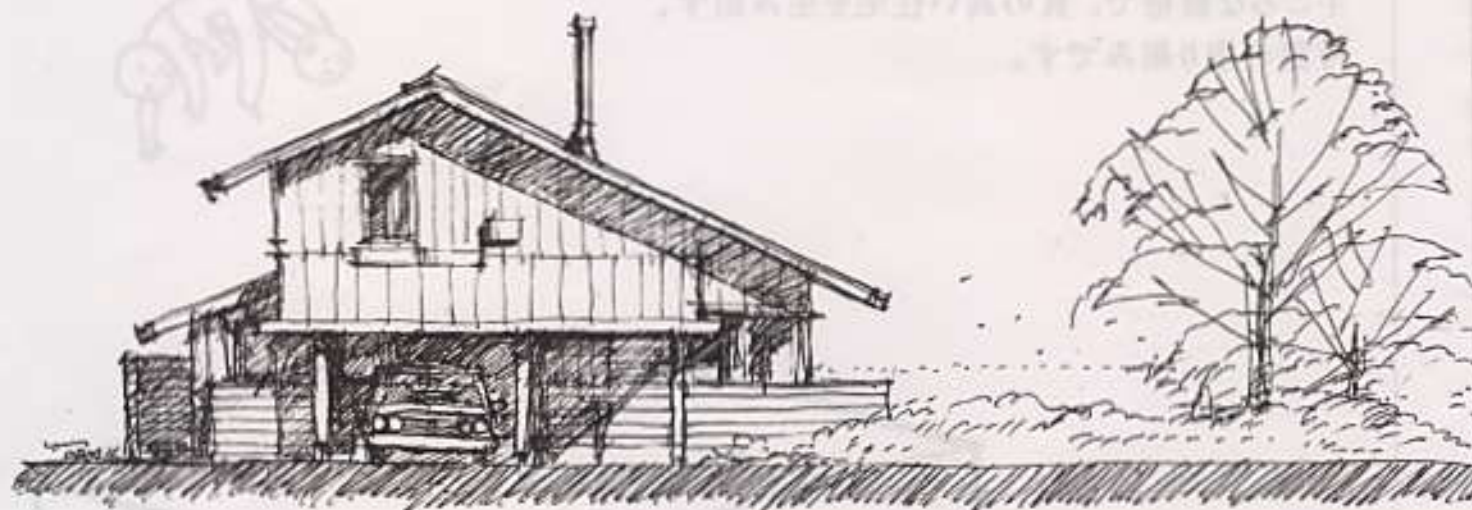
秋山東一が「おもしろい」という本に、スチュワート・ブランドが書いた「建物はいかにして学ぶか——建てられたあと何が起きるか」という本がある。まだ訳本が出ていないが、その本にこんな記述がある。

「壁や天井の開口部を塞ぐ前にすべて写真を撮り、図面と組み合わせて

「建物を単に空間的な構造物としてとらえるのではなく、じかんという要素を考えに入れ、この世界に生まれ、様々な成長を遂げ、やがては死に至る存在としてとらえなおす必要がある」（訳は自訳）

スチュワート・ブランドは、建物に6つの層を置き、その変化の速度を、それぞれの時間的尺度に応じた解決策をとる必要があるという。

その6つとは、



その要諦は、「維持保全の期間が30年以上」であればいいという点にあって、当初からのスケールダウンがはなはだしい。一体こりゃなんだと笑ってしまうほど縮んでしまった。けれども、こういう施策が打ち出されると、それをやっているかどうかによってユーザーの関心が向く。それだけで仕事が外されたのではかなわない。いいじゃない、やろうじゃないと秋山東一はいう。ただし、法律を超えて、その本質に迫ろうじゃないか、と。

バインダーに綴じ込み、一番の本を作る。電気配線や内装を担当する下請け業者たちはこの本を参照し、竣工時にはこの本を恭しく施主に贈呈する。彼は基礎工事や配管工事などについても同じ事をすることを推奨している。建物が古くなればなるほど、この本は貴重なものになる」（訳/村松剛）

これは「長期優良住宅普及促進法」がいう、建物の履歴そのものではないか。

1. 敷地 = SITE
  2. 構造 = STRUCTURE
  3. 外装 = SKIN
  4. 設備 = SERVICES
  5. 空間設計 = SPACE PLAN
  6. 家具調度 = STUFF
- である。

もともとなるのは〈設計〉である

スチュワート・ブランドはいう。  
「成長し、成熟するためには、建物

※BeVスタンダードは、「長期優良住宅等促進法」のクリアを視野に入れて進めます。

は長寿である必要があり、そのためには強靱な構造が不可欠である。最近では木材の軸組み構造が復活しているが、これは奨励すべきである。屋根はもちろん傾斜したほうがよく、できるだけ軒が深い方が壁を風雨や太陽から保護できる。壁は構造とは独立しているほうが保守管理が容易である」

秋山東一は、こういうスタンダード住宅をつくろうと試行錯誤し、悪戦苦闘してきたのであって、その意味では、時代がここに来て、少しばかり追いついてきたに過ぎない。この本質を知ろうとしないで、ただ商業的に「200年住宅」をいうところとの差は歴然としている。

いいじゃない、やろうじゃない  
「200年住宅」を。

スケッチ/秋山東一

## バラック建築に、 スタンダード住宅の「素形」をみる。 小池一三 (小池製作所)

秋山東一はどこに行っても、建物に目を注ぎ、目を止める。それがバラックだと身体のなかから喜びがこみ上げてくるようで、写真に撮り、コレクションにして愉しんでいる。なぜ、秋山東一はバラックにそんなに興味を持つのか。そこに秋山東一は、建築の「素形」をみたいからではないか、とぼくは推理した。

この「素形」という言葉は、内藤廣が用いた言葉である。趙海光は「建築家は人が用いた言葉を使うのはタブーだ」というが、秋山東一の場合、この「素形」という言葉が最も適切だと思う。

「素形」の対語は「異形」である。秋山東一にとっては、最近の住宅の方が異形であって、しかし彼は、意味不明な異形にはまるで興味を示さない。異形に異形を重ね着したような現代の住宅風景を、秋山東一は視界から消し去り、もっぱら素形へと目を向けるのである。それが氏にとってはバラックなのである。問題は、そこから先にある。氏が探査した素形を、現代住宅にどう止揚し得るのか。新しいスタンダード住宅として、それはカタチになるのか。

秋山東一は、フォルクスハウスの創造（1993年）において大きな実りを見せ、Be-h@us（2000年）において新世界へとたどり着き、これらの成果によって、氏は、スーパーカブ・カシオミニ・ウォシュレット・プリウスなどと並んで、この50年間に生まれた「ニッポンプロダクト88」に選ばれている。工業化住宅か

ら一つも選ばれず、氏の設計を選んだ点に審査員の見識をみるのであるが、この住宅が持つ真の価値は、これに学んだ工務店が設計力を飛躍的に高めたことにあると、わたしはみている。

昨年、二社の工務店がグッドデザイン賞を受賞した。鹿児島には評判のシンケンがあり、山梨には小澤建築工務の建物がある。それらほみな、フォルクスハウスやBe-h@usの影響なしにはあり得なかった。ここ10年来、これという工務店はみなこれに学び、あるいはこれに反発することで、自己表現を得たのである。酒造りでは、米が卒るまで削っていったものを大吟醸というが、今、秋山東一は、これまでの仕事を踏まえ、それをもう一度削り上げ、新たな素形をつくり出そうとしている。

それがBeVスタンダードである。簡素であること、明快であること、経済的であることなど、氏が一貫して追求してきたものを、さらなる純度を以て問おうとしているのである。興奮しないではられない。

設計は生きものである。学んだ、分かったと思ったという尻から、形骸化する。いつも鮮度を持つためには、自分を磨く場を持つことである。BeVスタンダードを学ぶ学校は、そのための設計道場である。

秋山東一の頭のなかに分け入り、原型に触れ、手順と作法を身につける場である。そこから、新たなプレーヤー工務店が誕生することを願ってやまない。